

# 高校における歴史の教科構造

## ——その問題点と再構成の視点——

織 田 長 繁 都 築 亨

### 1. はじめに

一昨年来、高校の日本史・世界史という歴史教科を現代化の要求に即応させるための一つの試みとして、両者を一つにまとめる視点でとらえ、日本史の内容を世界的視座の中に位置づけ、又世界史を日本の立場、現代的立脚点に立って構成すべく、いろいろの案を考えてきた。そしてプランの一部を実際のカリキュラムの中にくりこみ、統一的に歴史をまとめて学習する場合と、そうではなくて、日本史、世界史というそれぞれの形態で学習した場合との、学習者の方での反応とうけとめ方の相違について、いろいろ検証を加えてきたわけである。

その一応のまとめとしては、日本史は一つにしてすめた方が理解しやすいだろうが、世界史については現在普通に学習されている構成でもかなりの複雑な要素を多々包含しており、したがって世界史についていえば、現在の「世界史B」ないし「世界史A」の構成でも、取捨されなければならない面をすでにもっているという点で、統一歴史としての世界史の教科構造を吟味すべき要請をそれ自体のうちにもっているといつてよいであろう。

したがってここには主として世界史の教科構造のうち現在包括されている問題点をほり起こし、新らしく教科内容を再構成する場合の視点をはっきりしてゆきたい。今までと同様に、この報告も中間報告であり、一つの試案にすぎないが、その試案を一年一年の授業実践によって肉づけ、成案に近づけてゆきたいというのが私たちの意図である。

### 2. 「世界史」の教科内容構成の視点

現在の「世界史B」の教科書についてみると、その構成のうち二つのタイプをみとめることができる。一つは東洋、西洋ないしイスラム世界について、同時代的つながりを重くみて、総体的に古代、中世、近世、近代と追ってくるタイプであり、今一つは東洋の歴史的發展を近世まで通じ、ついで西洋の發展を通観し、しかるのち現代で一つにまとめるタイプである。山川出版や好学社の「世界史B」が前者であり、実教の旧教科書「世界史」や日本書院の「世界史」が後者であるといつてよいだろうが、現在の教科書ではその差はあ

まり感じられないほど、相似た構成をもってきているといえよう。しかしその二つのタイプをタイプとして分けておくことが、今後の世界史の内容構成を考えるさいに便宜であろう。

一体世界史を学習することは総体的に古代から近代までの歴史的發展のあとを学び、そこから歴史の流れをつかむことにあるのか、あるいは東洋、西洋それぞれの社会の歴史的發展をほり下げ、そこから現代の世界のなり立ちを追求することにあるのか。もしその双方に意味があるとするならば、その傾向の仕方が、多分世界史の構成の一つのキーポイントになるであろう。

今一つの視点は東洋と西洋の比重のおき方であろうし、それに関連してのインド・イスラム・アラブ・アフリカの比重のおき方である。日本がアジアの一國であり、今後の世界史の動向が、大きくアジア・アフリカの動きにかかわっているとすれば、東洋史に大きくスペースがさかればならないだろうし、その立場から世界史が創造されねばならない。又日本の現代文明に対する西欧的なものの影響に目をとめるときには、西欧中心の世界史が現段階では必要とされるかもしれない。「世界史」の教科書の変遷を見てくると次第に前者のタイプが強くなってきてはいるものの、大勢はやはり、後者であろう。アジア・アフリカに大きくスペースをさいているのは実教版の「世界史B」位のものである。

以上二つの視点に加えて、更に現代を重視することから、相対的に「前近代」の部分を押縮さざるを得ないという条件が入る。しかし「現代史」中心の世界史だから古代中世の歴史的内容は不要であるという見解には、私はそのまま同調できない。その基底にある歴史諸条件をほり下げ、その時代の問題に迫ることによって、現代の問題を解明する緒を見出すことができるだろうかと思うからである。「主題学習」というのはそうした意味をもたせるものとは思わなければならない。

### 3. 世界史の構成についての試案

次に示すのは、現行の「世界史B」の教科書について検討を加えながら、日本史をも含めての統一的世界

史学習をすすめるための一つのプランである。注に入れている現行教科書は記号で示したが、A：好学社、高等学校世界史B，B：山川出版社，詳説世界史（再訂版），C：山川出版社，新編世界史（再訂版），D

：教育図書，新版世界史BE：秀英出版，三訂世界史BF：清水書院：新編世界史B（改訂版），G：三省堂：世界史B三訂版，H：第一学習社（修文館）：世界史B（改訂），I：実教：世界史B改訂版

### I 原始社会

人類の起源，旧石器時代  
文明の歩み；農業牧畜の発生，新石器文化

日本民族の形成，日本の無土器文化

### II 古代西洋文明の発展

- ① オリент文化とその展開；メソポタミア，エジプト，ハッチ，フェニキア，ヘブライ，オリエンの統一（アッシリア，ペルシア帝国）
- ② ギリシア世界の展開とその文化；ミケーネ文明，ポリスの形成，ペルシア戦争，アテナイ民主制，ギリシア文化アレクサンダー帝国とヘレニズム
- ③ ローマの発展と地中海世界；共和政ローマ，ポエニ戦争とローマ社会の変動，三頭政治，シーザー独裁，ローマ帝政の成立，ローマの文化
- ④ キリスト教と古代末期；キリスト教の発展，古代ローマの動揺

### III 東洋古代国家の成立

- ① 古代インド文化の成立；インダス文明，カストの形成とヴェーダ社会，バラモンと仏教，マウリア王朝，クシアナ王朝，サンスクリット文化
- ② 中国古代文化；黄河文明，殷，周代封建制，春秋戦国の社会と諸子百家，秦の統一，漢帝国の成立，武帝の時代，後漢帝国，漢代文化，古代の朝鮮
- ③ 日本文化の黎明；縄文文化，弥生文化と水稻耕作の発生，小国家分立より統一まで，邪馬台国
- ④ 中国社会の分裂と統一；黄巾の乱，三国分立，南北朝時代と六朝文化，隋の統一，大唐帝国の成立，貞観開元，唐の文化，律令制国家群，東アジア文明圏の変動

### IV 日本の古代国家の形成と発展

- ① 大和朝廷と大陸文化；大和朝廷の統一，朝鮮半島の動き，古墳文化，氏姓制度，大陸文化の摂取，氏姓制の動揺，聖徳太子の政治，飛鳥文化
- ② 律令社会の成立；大化の改新，律令制度，白鳳文化，平城京と初期の政治，天平文化，律令制の動揺，平安遷都と律令制再建，弘仁貞観の文化
- ③ 貴族社会の繁栄；荘園の発展，武士の勃興，摂関政治，藤原氏の栄華，国風文化，未法思想
- ④ 律令制国家の衰退；地方の乱れ，武士の成長，院政，平氏政権，古代末期の文化

Iの原始社会の中にオリент，インダス，黄河文明（四大文明）を含めるもの（C，D，F），そしてIIのオリент文化のあとにインド，黄河文明を入れるもの（A，B）がある。しかしそれらは個々の地域における文化の出発点においた方がよいと考える。又IIIの区分はかなりの教科書でとられている分け方であるが，「アジア諸文明の形成」として，ペルシア，パルチア，ササン朝そしてインドにふれるもの（A）「東方諸文明圏の展開」としてイラン，東ローマ帝国，イスラムについてインドにふれるもの（D），イスラム文明圏の次に周代～元をふれるもの（F）がある。

しかしとにかくここで東洋に目をうつすことには異論がないところであろう。その漢代と三国との間に「日本文化の黎明」を入れたのは後漢書，魏志による倭のふれ方にもよるが，中国古代史のうちで「漢」と「三国」の間に時代の転換点をみとめ，三国以後を新しい東アジア史の展開として鳥瞰しようとする教科書も少くない（A；B，E，G，H）ただし，教科書の中にはヨーロッパ世界の形成，イスラムを隋唐帝国の前におくもの（I）ローマの次，インドの前にヨーロッパを入れるもの（F）もあるが，やや無理が感じられる。

V ヨーロッパ世界の形成と発展

- ① 西ヨーロッパ封建社会の形成；民族大移動とゲルマン諸国家，フランク王国，神聖ローマ帝国，ノルマンコンクエストとイングランド，封建制と荘園
- ② ビザンチン帝国；東ローマ帝国の発展，ビザンチン文化
- ③ 帝権と教権；ローマ，カトリック教会，修道院運動，皇帝と教皇との対立
- ④ 十字軍と中央集権国家の発展；十字軍とその影響，中世都市の発達，百年戦争，イギリス，フランス，イスパニアの国家的発展，ドイツ，イタリア

VI イスラム世界の形成

- ① アラビア社会とイスラム教；マホメット，イスラム教，初期カリフ
- ② サラセン帝国の発展；ウマイヤ朝，アッパース朝，イスラム文化
- ③ トルコの発展とインドのイスラム化；セルジュクトルコの発展，インド

VII 東アジア世界の中における日本

- ① 中国社会と北方民族；唐末五代の社会変動，宋の統一と君主独裁制，遼の南下，西夏，王安石の改革，金の建国，南宋，宋代の社会と経済，宋の文化
- ② 蒙古民族の発展；モンゴル族の興起（チンギスハン），蒙古帝国の征服，四汗国，元の中国支配，元代文化，東西の接触（イスラム世界とキリスト教世界）
- ③ 日本の武家社会形成；平氏滅亡，鎌倉幕府の成立，承久の変，執権政治，貞永式目，産業の発達，荘園の変質，鎌倉時代の文化
- ④ 蒙古襲来と鎌倉幕府滅亡；蒙古襲来，徳政令，得宗支配，幕府の滅亡，建武新政
- ⑤ 室町幕府と対明貿易；南北朝の動乱，足利政権の統一，明の統一，永楽帝の治世，対明貿易（勘合貿易），守護大名の成長，惣村の形成と土一揆，北山文化
- ⑥ 封建社会の再編成；応仁の乱，東山文化，都市の発達，戦国大名，統一への動き

Vのヨーロッパ世界の形成とVIのイスラム世界の形成については、教科書ではイスラム世界を先にしているもの（A，D）もあるし、又唐のあとでイスラム世界の形成にふれるもの（E，H）あるいはモンゴルのあとにイスラムを扱かうもの（G）などもある。しかし順序としてはやはり表のようにV，VIとするか、あるいはVIのイスラム世界をVの③と④の間に入れるべきであろう。場合によれば④の十字軍以後は近代の部（VIII）の冒頭において近代ヨーロッパ世界の出発点に位置づけておく方がよいのかもしれない（A，B）その

点の検討についてはなお考慮の余地をもっている。

VIIについては、元のあとに中世ヨーロッパをふれている教科書（E）もあり、又元のあと十字軍を位置づけているもの（G）もある。中国史の流れの中で元帝国の滅亡は一つの区切りをもっているとも考えられる、ここではそのあと、元寇に関連づけて日本の中世をもってきてみた。したがって明は室町幕府の対明交渉の中に位置づけたがこれは少し無理が生ずるかもしれない。

VIII 近代ヨーロッパ社会の成立

- ① 地理上の発見；地理上の発見の動機，インド航路新大陸の発見，その影響
- ② ルネサンス；ルネサンスの基盤，ヒューマニズム，美術，文学，科学と技術
- ③ 宗教改革；教会刷新の動き，ルターの宗教改革，カルヴィニズム，イギリスの国教会，カトリックの覚醒
- ④ 絶対主義国家の発達；絶対主義と重商主義，スペイン世界帝国，オランダ独立，エリザベス時代のイギリス，フランスユグノー戦争，ドイツ三十年戦争，プロシアとオーストリア，ロシアの絶対主義，ポーランド分割
- ⑤ 絶対主義国家の植民活動；オランダ，イギリス，フランス各国の植民活動
- ⑥ イギリス議会政治の発展；市民階級の成長，清教徒改革，王政復古，名誉革命
- ⑦ 17，18世紀の文化，宮廷文化，国民文学，科学と哲学，政治学説，啓蒙思想

**Ⅸ アジア専制国家と日本の封建社会**

- ① チムール帝国とオスマントルコ, チムール帝国の興亡, オスマン・トルコ帝国
- ② ムガル帝国; ムガル帝国, 西欧の進出, インド, イスラム文化
- ③ 清による中国支配; 明の衰退, 満州族の建国康熙乾隆の治, 清代の社会と文化
- ④ ヨーロッパの東洋進出; キリスト教の中国渡来, ポルトガル人の種ヶ島渡来, 日本の切支丹
- ⑤ 信長秀吉による統一; 信長の天下統一, 秀吉の全国支配, 朝鮮出兵, 桃山文化
- ⑥ 幕藩体制の確立; 江戸幕府の創設, 幕府の職制, 大名支配, 農民統制, 鎖国まで
- ⑦ 封建社会の成熟と動揺; 社会経済の発達 (諸産業, 交通, 商業金融), 文治政治, 元禄文化, 享保改革, 田沼時代, 寛政改革, 幕政の窮乏, 百姓一揆, 家内工業, 化政文化, 洋学と国学, 天保の改革

ほとんどの教科書が, ルネサンス→地理上の発見→宗教改革という順をとっている (B, C, D, E, F, G, H) が, 中世から近世への転換点における世界史の総体としての把握という観点からいえば, 上のようにした方がよいのではないか, ただしイギリスの議会政治については, 市民革命のトップに (この構成では X) 位置づける (A, E, D, H, G, F) の

も一つの考え方であろう。

Ⅸの分野に属する明の成立はⅦに上げておいたが, 明を含めて, ここに位置づけている教科書は3社 (A, C, I) である。(他は市民社会の発展のあとに位置づけている)

日本史についてはこのように位置づけた方が, 現行よりわかりやすいのではないか。

**X ヨーロッパ市民社会の発展**

- ① アメリカ独立革命; 13植民地と英本国の重商主義, 独立戦争, 独立宣言
- ② フランス革命; アンシャン・レジーム, 革命の勃発, 国民議会, 国民公会, ロベスピエール独裁, 総裁政府, ナポレオンの支配と帝政, 没落
- ③ 産業革命; 原因, 産業革命の進展, 社会問題, 労働運動, 社会主義
- ④ ウィーン体制; ウィーン会議, 神聖同盟, 四国同盟, ウィーン体制の動揺
- ⑤ 七月革命; 七月革命とその影響, イギリスの自由主義, チャーチズム
- ⑥ 二月革命; 七月王政, 二月革命, ルイ・ボナパルト, 三月革命
- ⑦ アメリカの発展; 民主政治の発展, 西漸運動, 南北戦争, 資本主義発展
- ⑧ ナショナリズム; イタリア統一運動, ドイツの統一, 普墺戦争, 普仏戦争, ドイツ帝国の発展, ビスマルク時代
- ⑨ パリ・コンミューンとフランス第三共和政
- ⑩ ロシヤと東方問題, クリミア戦争, 農奴解放ベルリン会議
- ⑪ イギリスの繁栄; ヴィクトリア時代, 大英帝国
- ⑫ 市民文化の成熟

**XI 列強のアジア進出とアジアの近代化**

- ① ロシアの東方進出; シベリア開拓, 清との接触, 日本近海へ, 日本の北方探検
- ② 蘭仏の東南アジア経営; 東インド会社, 日本貿易, フランスのインドシナ支配
- ③ イギリスのインド支配; セポイの叛乱とインド帝国の成立
- ④ 中国の動揺; アヘン戦争; 清国の疲弊, 太平天国の乱, 同治の中興, (洋務運動)
- ⑤ 明治維新; 開国, 通商条約の調印の安政大獄, 攘夷運動の激化, 薩長連合, 大政奉還, 明治維新, 廃藩置県, 徴兵令, 地租改正, 初期の外交, 文明開化
- ⑥ 立憲政治の発達; 自由民権, 政党の成立, 憲法の制定, 議会政治, 近代文化の発達
- ⑦ 近代日本の海外発展; 条約改正, 朝鮮進出, 日清戦争, 日本の資本主義的発展

**XII 帝国主義とアジアの動き**

- ① 帝国主義の成立; 独占資本と植民地, イギリス, フランス, ドイツの帝国主義, ロシア, アメリカの帝国主義

- ② アフリカ・太平洋の分割；セシルローズと南ア戦争，3C政策，ファショダ事件，英仏協商，太平洋分割
- ③ 中国の対応；変法運動と戊戌の政変，列強の中国利権争奪，義和団事件，北清事変
- ④ 日露戦争；日英同盟，日露の対立，開戦，ポーツマス条約，戦後の国際関係
- ⑤ 日露戦後の発展と文化；産業資本の発展，社会問題，桂園時代の政治，近代日本の文化
- ⑥ 辛亥革命とアジアナショナリズム；三民主義，辛亥革命，トルコの革新，インド国民会議

### XIII 第一次世界大戦

- ① 大戦前の国際関係；三国同盟と三国協商；モロッコ事件，バルカン問題
- ② 大戦の勃発；サラエボ事件，開戦，日本の参戦，戦局の進展とアメリカ参戦
- ③ ロシア革命；革命前のロシア，三月革命，十一月革命，ソビエト政権の成立
- ④ 日本の大陸進出；21ヶ条，石井ランシング協定，シベリア出兵
- ⑤ ヴェルサイユ体制；ウィルソン14ヶ条，ヴェルサイユ条約，国際連盟の成立，軍縮会議

### XIV 大正デモクラシーと国際協調

- ① 大正デモクラシー；大正政変と第一次護憲運動，市民文化のおこり
- ② 米騒動と民衆運動；大戦による好景気，米騒動，原内閣の成立，民衆運動の高まり
- ③ ワイマール体制と戦後の世界，ドイツ共和国の成立，賠償問題とインフレーション，イギリス労働党内閣の成立，フランスの情況，ソビエト連邦の発展，アメリカの繁栄
- ④ アジアのナショナリズム；トルコの革命，イスラム独立運動，五四運動，北伐と国民革命

### XV ファシズムと第二次世界大戦

- ① 金融恐慌と外交政策の転換；金融恐慌，田中内閣の成立，積極外交，浜口内閣と金解禁，ロンドン会議
- ② 大恐慌と各国の対応；大恐慌，ニューディール，英，仏のブロック経済
- ③ ソ連の発展
- ④ ファシズム；イタリアファシスト政権の成立，ナチスの政権，満州事変，国際連盟脱退，5.15事件，2.26事件，日華事変，戦時体制
- ⑤ 第二次大戦；日独防共協定，ミュンヘン会談，第二次大戦，三国同盟，独ソ開戦
- ⑥ 太平洋戦争；日米開戦，戦争体制の強化

### XVI 現代の世界

- ① 国際連合と戦後処理；ドイツの戦後処理，国際連合，日本の占領と民主化政策
- ② 日本国憲法の成立と国内情勢
- ③ アジア，アフリカ諸民族の独立；南北朝鮮の独立，ベトナム，インドネシア，中華人民共和国の成立
- ④ 二つの世界；北大西洋条約機構，西ヨーロッパの経済復興，共産主義国の形成，朝鮮動乱
- ⑤ 日本の国際社会復帰と国際情勢の変化；サンフランシスコ講和条約，日ソ共同宣言，インドシナ戦争，ジュネーブ国際会議，原子力管理問題，アジア・アフリカ会議
- ⑥ 日本の経済成長と文化

Xでの問題点は産業革命をどのように取上げるかということであろうが，イギリスの市民革命につづけて産業革命をみる（F）か，産業革命のあとイギリスの自由主義をもって来るか（D）位のところで，ほとんどは表の様な配列であろう。そのヨーロッパとアジア日本の近代化を扱うXIについて，かなりの教科書（D，E，F，G，H）が時，清，ムガル帝国から見直しているが，前述のようにこれらをKにくりあげ，ここ

にはアヘン戦争以後をまとめてみることにした。

アヘン戦争を帝国主義のアフリカ分割の次にふれているものもある（I）が，これは年代的にみて不都合であろう。

第一次大戦以後の現行教科書の配列が，かなり様々な態様をみせながら，満足のゆきそうなものを見出せないのは現代史自体の複雑さに起因するといえよう。しかし日本史の構成についても，大戦と大正デモクラ

シー、米騒動などのまとめ方についてうまくない教科書が多いことを考えると、むしろ世界史の中に日本を位置づけながら構成を新しく考えるべきであろう。大戦の叙述からロシア革命だけを別にして後にまとめたり(A, B)シベリア出兵のあとにロシア革命をとりあげたり(B), ヴェルサイユ体制から第二次大戦まで通してみた上でロシア革命, ニューディルにふれたり(D)するのはむしろ現代史の像を混乱させることになりかねない。

#### 4. まとめにかえて

現在の中学校の歴史的分野の構成のように、日本史を中心としてそれにヨーロッパと中国をつけ加えるようなそうした世界史の構成はのぞましくないと私は考える。むしろ中学校では日本史を通して先に学習し、ついで世界史を近代を中心として通観する方がのぞましいと思う。しかし高校での歴史は世界史を中心に学

習されねばならぬと考えるし、その世界史は日本不在の世界史であってはならないと思う。日本の歴史的発展を世界史全体の中に位置づけるのは必ずしも両者を一緒に結びつけることではない。2, 3年の2年間を通じて日本史, 世界史を学習するとき今のままの構成で進度を調節することにより, 同時的な発展をみることはできるかもしれない。或は先に近代までの西洋の発展を通し, ついで東洋を眺め而るのち日本の歴史を通観し, 最後に現代の歴史を統一的に展望するのも一つの方法である。

しかしながら, 今迄に学習されている高校での歴史はそれ自体のうちに構成上の問題点をもっているし, ある意味では既成の観念に拘束されて, 惰性で形づくられた歴史教科の構造を根底から改編しなければならない要請をうけているときえいえる。その教科内容を再構成するための一つの試みがこのにあげたプランであるが, その内容を更に集約化し, 社会的要請に即応させることは今後の課題であろう。